

### 三 教員生活へ

増川高等女  
学校勤務

増川へのお勤めを受けて帰ったとき、姉は一段と喜んでくれた。そこでさっそく赴任の仕度にかかった。

姉は、まず学校の先生なので一番に袴の調達がいるといって、袴の布地を尾道まで買いに行つてこいといって、十円札一枚と船賃と小遣いとして一円、計十一円を持たせてくれた。朝の一番の巡航船で尾道まで行き、二、三の商店を見て廻り、十円でちよつとおつりのある程度の布地を買った。色は当時海老茶が流行であつたが、私は紺にした。帰つてさっそく仕立てにかかり、一日でちゃんと仕上げた。

着物の反物は、姉がいつ用意してくれたのか出してきて仕立てるようにいった。羽織は四姉が贈つてくれた。羽織・着物のいずれも、モウカ（真岡）木綿であつた。そのとき、私を小さいとき可愛がつて下さつた常石の端田の下のお伯母様も大変喜んで、寒いから綿を買つて羽織に入れて仕立て着て行きなさいといつて五十銭下さつたので、せっかくのご厚意だから有り難くいただいて、羽織は温かい綿入羽織に仕立てた。

こうして、あれこれと仕度に忙しくしている内に年の瀬も迫り、新しい年を迎えた。

めでたい春、私の人生に光明を与えてくれた希望の春であつた。試験合格のときもだが、正月にも氏神様にお参りしてお礼を述べ、しっかりとやりますと誓つた。今までになく私の心は明るく、大きな希望で胸をふくらませる嬉しい春である。

一月八日がきた。上から下まで新しい物で身も心も新しい門出である。袴をつけた私の姿に姉は嬉しそうであった。きつと、花嫁衣裳をつけた我が子姿に見入り、嬉しい涙にくれる母親の心境であったのであろう。送って出て「しっかりやれよ、何事も真心こめてやれよ。」と、涙ながらに励まして、私の姿が見えなくなるまで家に入らなかつた。

年十九歳、女学校の先生にしては誠に若い先生であつた。今でいう助手級であつたのだろう。しかし、職名は講師の辞令で、教科は被服構成を担当させて下さつた。

小学校三、四年生頃からの願望であつた学校の先生になれたのだから、感謝の念と、しつかりやらねばという決意は実に強かつた。とにかく一生懸命であつた。教材研究・授業参観・生徒との対話等々、張り切つた希望の毎日が続いた。そして毎日の授業が楽しかつた。

校長先生から「若いのによくやる」と誉めていただき、初任給十八円を有り難く、もったいなくいただいた。

さっそく、父母の霊前へのお供物と、氏神様への奉納品、御神燈の下にさげる房（白羽二重地に日本刺繍を入れたもの）、姉への贈物（肌着）を調達して、ある土曜の午後から日曜日にかけて帰省して、それぞれに供えたり届けたりして喜んでもらった。

赴任三カ月後の四月から、舎監の兼務を命ぜられた。親代わりをせねばならぬ舎監の役目で、若いお母さんである。でも、ちつとも臆することはなかつた。人間はその気になれば何でもできるのだということを体験した。

校長先生のお宅へよく呼ばれて行つていた。また土曜日の放課後など、校長先生が市内へ外出なさるときにお伴をさせていだいていた。岡山のお参り所へもご一緒したこともあつた。職員朝礼・職員会議・学校行事など、生徒への訓辞を通しての校長先生の教育信念にはいつも感銘していたが、ご家庭での校長先生のお態度やお心構えは学校とまた変わった愛情の細やかな優しい、美しいものを発揮しておられた。

わずか一カ年のお勤めであったが、校長先生のお側で、他では得られないものを色々と学びとらせていただいた。誠に増川ヒサ先生のご仁徳は、仰げども限りない高いものであった。

教職についてからの、課せられた教育の大任を果たすための勉強と努力はもちろん最大限を尽くしていたが、そのかたわら上級の資格を得るための勉強も決しておろそかにしないで、余暇を利用して受験勉強も続けていた。

初級の資格は運よく女学校卒業二年目で取った。今度は本職のかたわらの勉強なので、根気強い積み重ねの勉強でなければいかぬのである。増川校長先生の計らいで、一年後には公立学校の久く地ち村立補習学校へ転任した。籍は補習学校であったが、初年度の一年は小学校勤務であった。

**小学校教員** 当時の校長先生は、難しい低学年や高学年を未経験な若い女教師の私に当てないで、三年生の担当の一年間 を命ぜられた。

小学校なので修身、算術、読み方、書き方、綴り方、唱歌、体操等々、全学科を学級担任の教師一人で受け持つのである。そこで困ったのが唱歌である。元来、私は音痴の部類で、音楽ときたら全然駄目なので、唱歌を担当することには全然自信がない。といって、学科交換授業を頼むことは若さの勢いからか、または性格からか、とにかく出来ない。そこで私は思った。「他の人に出来ることが自分に出来ないというのは、勉強が足りないからなのだ。よし、夜を徹してでも三年生の唱歌授業が完全出来るよう勉強しよう。」と決心した。

唱歌一教科の教材研究に要する時間と努力は、唱歌以外の全教科の教材研究に要するものより多かった。とにかく何が何でも放課後はもちろん、暇さえあればオルガンの前で楽譜を覗き込み、慣れぬ手つきで弾く歌うなどして練習に練習を重ねて自信たっぷり、教案も密案を作って授業に出た。

初めは教案に従って、まず新教材の音譜と歌詞を板書し、歌詞の内容吟味から入る。これはうまくいった。次は範

唱、これも何とかできた。次はオルガンにより旋律を一通り弾く、この関所まではどうやら越えることが出来た。ところが、次に歌詞とオルガンの両方を一度に示範する段階になって、はたと行きづまった。練習のときは自信満々であつたのが、本番になるとうまくいかない。歌つておればオルガンが弾けない、オルガンを弾いておれば歌えないといった調子で、まったくひやひやはらはら、汗は滝のように流れる、苦しい四十五分の授業であつた。

しかし、二回、三回と重ねていくうちに、少しずつ向上して楽になってきた。でもこうした芸術学科の指導者は、先天的なものが必要で、堪能な指導者から見れば、私の授業などまったく問題にならないことだったろう。

あるときの児童との会話に、

「先生、唱歌はきらいであります。」

「では何が好きですか。」

「体操が好きであります。」

すると四十五人の学級の児童が「僕们です。」「私もです。」という。元来、私は小学校時代からお転婆で、飛んだ



久地小学校教諭時代のミキ先生（前から3列目左端）1922年

り走ったりは大好きで、体操はよく出来ていた。好きこそもの上手なれというが、体操の指導は児童にも満足を与えていたのだろう。「わかりました。じゃあ体操にしましょう。」といったものの、そのときぐらい責任を感じたことはなかった。

教師は児童・生徒の鏡である。教師のすべてが児童・生徒に反映するということは、教師になる前から承知しており、そのことは十分心して教壇に立ったつもりであったが、こうした実際問題にぶつかって、理論と現実が一致しないことをしみじみ感じ、良い体験となった。今の私なら、学科交換授業を依頼して児童に満足のいく合理的な授業を行ったであろうと思う。

小学校勤務一年間、いや私の一生を通しての教員生活の大きな「ミス」であり、また教師として一生を捧げる決心であった私には、この苦い体験がよい教訓になったわけである。

小学校教員の一年間は、このことだけでなく、リズム感に欠けているために色々苦労した。遊戯（ダンス）の講習会へも他の女先生たちと一緒に行っていたが、技を覚えることは誰よりも早く、また確実であったが、リズムに合わせて踊るとなると、まったく合わないのに困った。一、二、三、四でやれば出来るのに、音楽には合わない。そこで講習に一緒に行った先生方が、「貴方は踊らなくてよいから、そこにいて私らに技を次々と教えてくれ。そうすれば私らがリズムに合わせて踊りながら練習して覚えるから。」ということで、私はもっぱら技の覚え役になったこともある。それでも何とかこぎつけて児童に教えるまでになって、運動会には何とかやれるところまでこぎつけた。

今一つ困って今日になっても忘れられぬことは、当時小学校では年一回の運動会と同様に学芸会と称し演劇発表会をしていた。そのときもまた、演劇の脚本を見ながら振付けをしてちゃんと一つの劇は出来上がったのだが、その中にリズムに合わすところがあつて困ったことがある。

こうした点ではずいぶん苦勞したが、小学校の児童は総じて無邪気で明るくて素直であつたので、指導がしやすく、また可愛かった。

### 実業補習学校 勤務の四年間

その後、安佐郡久地村立実業補習学校専務となつた。赴任早々感じたのは、実業補習学校の教育勤務の四年間は、一見、小学校教育の補充のように考えられる向きもあつたことである。しかし実業補習学校令にあるように、いちおう義務教育は終えてはいるが、さらに知識技能を広め、高め、徳を養ひ、健全なる日本国民として、日本女性として研鑽を積む機関として制定されているのである。にもかかわらず、当時の補習学校の女子部の教育内容は、裁縫科の授業が大半を占め、全人教育の場としては欠ける面が多く、これでは補習学校教育の目的は達せられないことを痛感していた。

そこで、赴任間もない或る日、当時は郡役所の監督下にあつたので、郡役所の学務課長が小学校視察に来られたときに、私はこの機会をかりて課長さんに「補習学校の現状は補習学校教育目的を達する内容になっていないので、改善を要する点が多々ある。」ということを進言したところ、課長さんは非常に共鳴して、改善すべきところはどしどし改善し、充実した教育をしてくれと激励をいただいた。当時は郡の監督官が来られたら、みんな平身低頭の態で迎え、何を言われてもご無理ご尤もという時代なので、二十歳前後の若さでおめざ臆せずやるものだから、周囲の者はもとより課長さんもびっくりされていたとかいうことだった。私は、さっそく我が意を得たりで、校長先生とも相談して、教養教科の設定、その教科担当の教師招聘しょうへいのことや、また授業時間割の編成、教具・校具の増設等々、教育内容改善案を立て、役場へも予算折衝に行き、予算増をもらつて、全人教育・婦道研修の場としての緒につけることができた。

しかし理想とまではいかなかったが、とにかく将来への夢と理想で毎日を張り切つて実業補習教育の充実に邁進し

た。思えば希望と喜びの日々であった。放課後に、順次、個人訓話・個人指導・家庭訪問などをして、個性の伸長、家庭との連携を保ち、教育効果を挙げることに努力を続けた。

一方、教員検定受験勉強も、毎日どんなに学校から遅く帰っても欠かさず、少なくとも三時間程度はしていた。したがって、食事や自分の身の廻りのことは時間を取らぬようにしてきた。食事も簡単につくっていた。或るときの思い出なのだが、校長先生の奥様から、白菜の茹でたのを一株いただいた。それに油揚げを一枚買つてきざみ込んで煮付けて、朝も昼の弁当にも、また晩のおかずにもして二日くらい食べていた。考えてみると、若いときから粗食に甘んじていたのである。生活費（食費、衣類等）を節約して、研究費（図書代、講習会・講演会出席）に充当していた。

#### 呉市の女学校へ 勤務十七年

昭和二年（一九二七）六月に、呉市立阿賀実科高等女学校に転勤の命を受けた。せっかく四年間精魂を傾倒して着々と教育効果を挙げつつある矢先でもあり、また生徒や地域の人たちへも愛情がわき、愛着心も強く働くので動きたくなかったが、上司の命となると仕方がなかった。

宮仕えのつらさを強く感じたが、とにかく辞令をいただいたからには、いつまでも女々しくしているわけにはゆかないので、心を新たにし、新任校でまた懸命にやろうと己れに誓い出発した。新任校の教育内容、組織・校風・伝統、校長の方針、生徒の個性・能力、地域社会の風俗・習慣等をのみ込むまでには相当の時間と努力がいったが、思ったよりか早く解り、ここでもまた身を入れて教育に精進した。

#### 教育研究大会時 の研究発表

実業補習学校にいるころから、郡や県の主催の教育研究大会に出席して意見をよく発表していた。呉に変わってから、毎年開催される県大会には、県からの要請もあったり、また自ら自発的に、女子教育に対する意見を発表したものだ。その時期がちょうど毎年のお祭りのお祭りの前後なので、学校から遅く帰って家事一切を済ませて、その発表要項をまとめるときに、お祭りの太鼓の練習が続いていた。前夜祭、本祭りと幾

日も太鼓の音が鳴り響くのに、元来ならお祭りは楽しいはずのものなのに、それがやかましく耳ざわりになっていた。

当時は、女性には静かに、おとなしく、慎ましくしているというのがよいので、教員の中にもその風習があつて、どちらかというと女子で意見を発表するという人は少なかった。したがって会場では、私の行動は県知事や県官などはもちろん会員にも目立つらしく、議事等についての決議および諮問案に対する答申案作成が委員付託の場合には、必ず委員に選ばれ、その中で男子一名が委員長、女子の私に副委員長を命ぜられていた。

元来が浅学な身なので――すなわち、系統だった学校に行つて学問しているわけではなく、ただ教育が好きで教員検定を次々と受け、資格を取つて教壇に立っている身なので――人の頭に立つ仕事をするには、あまりにも荷が重かった。しかし、決して人後に落ちてはならぬの精神が常に漲つて



呉市立阿賀実科高等女学校教諭時代 1927～1942年



いたので、絶えず教員検定の勉強だけでなく、広く勉強するよう努力してきた。

昭和五、六年頃から、あちらこちら（婦人会、青年団、父兄会、その他）から講演や講習の講師に招聘しょうへいされていたが、謝礼はいっさい受けぬ主義を通してきた。それは、至らぬ私を利用していただくことが有り難く、またそのことによって自分が磨かれ向上していくのだから、かえって私こそ有り難い次第であると考えていたからである。

昭和七年、九年、十五年と、全国青年教育研究大会に広島県を代表して出席し、研究・体験の発表をした。こうした大会時には色々な議題が出ていて、それに対する意見を言うために発言権を取るのだが、なかなか競争が激しくて発言権が取れなかった。そのとき、全然知らない、私よりはるかに年齢も上で髭を生やしたどこかの校長さんらしい方が、私に、議長が貴方の方ばかり目をつけて見ているから早く立ちなさいと言って下さった。とうとう三回目くらいるとき、発言権がとれたので、今度はやっと落ち着いて意見を発表できた。会場から割れるような拍手を受けた。私の意見が良いというわけではなかったたのであろうが、女性が堂々と臆せず発表するところに感激があったのであると思う。自分としても誠に痛快であった。

そのときも委員に選ばれた。大会の期間は三日間であったが、期間中「広島県の神原さん（旧姓）“で人気者になった。しかし、苦勞も大きかった。県の代表者としての重責を担っているのだから、一言一句、まな事は言えないという緊張感で……。

#### 文部大臣より教育 功勞表彰を受ける

昭和八年（一九三三）五月三日、三十一歳のとき文部大臣より教育功勞者として表彰を受けた。広島県からは、丸山豊、小山実先生と私の三人であった。県下の教員もあまたおられる中を、浅学菲才な私に何と有り難い、もつたないことであろうか、まったく感極まる思いであった。

受賞のときは、県から平岡主事と遠藤視学さんとが同行して下さった。青山の青年会館に宿泊したのだが、その青

た。そのお姿が今もなお、はっきりと私の目に心にある、お懐かしい先生である。

私はその山本先生の胸像の前に、文部大臣からいただいた表彰状と勲章を持って行って、今日の榮譽を報告するとともに、「私は一生、生ある限り、教育に捧げます。」と誓ったのである。その後、たびたび研究会や講習会などで上京していたが、終戦まではその青山青年会館に山本先生に会いに行くような気持ちで、ここに宿泊をとっていた。

東京へもよく出かけて、共立・渡辺・和洋・大妻などの女子専門学校等で勉強したものだ。自分は高等教育（大学教育）を受けていないのだから、人並みのことをしていたのでは人並み以下の者にしかならぬのだ、人並み以上の努力をして始めて人並みの者になれるのだから、と常に心にいいきかせ、そのように努力してきた。

昭和三、四年の夏休み中、人気のない沼隈郡千年村の阿伏兔観音寺の堂にこもり、受験勉強をした。食事は能登原



小学生のミキに影響を与えた  
山本瀧之助校長の碑

年会館の玄関には、「全国の青年の父」と呼ばれた沼隈郡千年村字草深のご出身、山本瀧之助先生の胸像が飾られていた。山本瀧之助先生は私の小学校一年生のときの恩師である。紋付きの羽織に袴、白い鼻緒の高下駄に山高帽子姿で、常石西組の観音様の境内に三教室の小さな尋常小学校があつたのだが、そこに毎日お通いになっていた。習字の時間、示範に横一を書くとき、筆の使い方を「ドシン、スー、エンエン」といって教えて下さっていた。

の市川の姉の家から、毎日甥の千代松が運んでくれた。市川の姉はもとより姉一家は、私の勉強のために随分と協力してくれたのである。我が子でさえもあんなには出来ないであろうと思うことが常であった。甥も姪も私を姉のようにして大切にしてくれたものだ。それは姉が私の生まれ落ちたときから手塩にかけて育ててくれたので、私が大人になってからも我が子同様に思っていたからであろうと思う。

あの阿伏兔の観音様の横の岩壁に打ち寄せる波の音を聞きながら、昼も夜も身心を打ち込んで勉強したことは、私の生涯に大きな想い出とともに、大きな収穫であったと思う。もう一度あの時代にもどり、あのような勉強がしたいが、もう生まれ代わらぬ限りかなわぬことである。

私は自分が勉強するだけでなく、生徒にもぐんぐん勉強さ

せていた。学校の教科はもちろんであるが、余暇に上級生や卒業生に教員検定の勉強をさせ、毎年幾人かずつ受験させていた。一度や二度では合格は出来ないが、根気強くやらせるので、少数ずつではあるが合格していた。その人たちを、私は県の学務課へお願いして教員に採用してもらっていた。採用の前、県から呼び出しがあるので、そのとき必ず私は同伴していた。発令になって赴任するときも、必ず学校まで付き添って行って、学校長や教職員、さらに村



沼隈郡の阿伏兔観音

ここに参籠して教員検定試験の勉強に励んだ 1928年ごろ

役場などに御挨拶とともに御依頼に行っていた。帰るときには三つ子を置いて帰るような気がして、だれの場合でもいつも泣き別れをして帰っていたものだ。

学校が休暇になると、その教え子たちがそれぞれ帰ってくる。産みの親元より私の家に先にもどって来ていた。この連中が帰ってくるのが何日も前から楽しみで楽しみで、待ちきれぬ思いで待っていたものである。

赴任して初めての休みに帰ってきた者は、玄関に入るなり上にもあがらないで玄関で私に泣きすぎるようなこともあった。そのようなときは、とにかくあがつて泣きなさいといって、先にもどっている者たちが腕をつかまえて上がらせたりすることもあった。そのときの彼女らの心境は、ひとまず任務を<sup>つが</sup>悉く終えて帰省できたので、安心と喜びと懐かしさで胸が込み上げてきて泣いたのだと思う。そこにいる者も、みんなもらい泣きする場面もたびたびあった。帰ってきた晩は、それぞれ一学期間に起こったこと、やったこと、困ったこと、嬉しかったことなど、夜を徹して皆が話してくれていた。その一つ一つに批判と指導を加えながら聞くのであった。

#### 新採用教員講習 会の講師として

県では現在も行われているようであるが、当時、新採用の教員に講習を受けさせておられた。私はその新採用教員講習会の講師を委嘱されて、三、四年間出たことがある。

その或る年に、私が増川高女で一年間お勤めをしていたころに一緒だった先生が、新採用教員の講習を受けに来ておられて、お互いにびっくりしたことがある。十年以上は経っておったと思うが、その先生曰く、「今まで、ぼやぼやしていたことが恥しいわ。」とおっしゃられた。別に恥しく思われることはないのに。しかし、その先生の気持ちを考えてみれば、元は同じような立場にあった者が、十年後の今日、一方は受講者、一方は講師という立場になっていたから、いやな思いがしたのであろうと恐縮した。

その後もこうしたような立場の例は他にもあった。それは、私が増川高女の生徒時代に助手として勤めておられた

先生（指導を受けた先生で、公立学校に遅くから希望されたのであろう。）がこの新採用教員の講習に来ておられたこともあった。しかし私にとっては、いくら立場は変わっていても、どこまでも師であるので、尊敬の念は変わりないわけである。

また、こんなこともあった。旧制女子専門学校夏期講習会などで御指導いただいた教授の先生と一緒に、郡主催の女教員研究大会に助言者として、また或るときは講師として招かれたり、またPTAの総会のときの講師に一緒に招聘されたこともあったが、何かおがましいような気がしていた。しかし、恩師は恩師としてのエチケットを十分に守りながら、やることだけはきちんとしていたと思う。

教科書編纂委員の委嘱  
を広島県より受ける

昭和八年（一九三三）、広島県青年学校家事教科書および同作法教科書編纂委員の委嘱を県より受け、委員長として編纂に当たった。

約一年にわたり数名の委員とともに研究に出かけたり、この道の権威者の御高見を拝聴する機会をたびたび設けたり、また権威ある文献によつて研究を重ね、また広島県下の青年学校の現実の視察参観および地域別の衣・食・住の調査統計を出す等々、研究に研究を重ねた。衣・食・住、育児、看護、養老とに分け、それぞれ分担して草案を作り、それを幾度か訂正して、ようやく一つのものにまとめ印刷に及んだ。そのときの、肩の重荷が下り急に気が抜けたような安心したような何ともいえないあの時の私の気持は未だに忘れられない。出来上がったものは、県の御指示により、県下の青年学校の生徒に使用されたわけであるが、皆さんから非常に喜ばれたので、一年にわたる長い間の苦勞が報いられたようで嬉しかった。

初め編纂委員の委嘱を受けたとき、何分にも一冊の本を作るということは初めてなので、ちよつと躊躇した。言葉での発表は方々でたびたびやったけれど、文章での発表は小冊誌に四く五頁程度のを時々載せていたくらいのこと

とで、全然自信がなかった。勇気を出してやってみることにしたのであるが、やる気になればできないことはない、すなわち、為せば成ることをここでも体験したわけである。

### 御親閲の光

### 栄に浴す

昭和十六年（一九四二）五月二十二日、全国中等学校の教官ならびに生徒に対し、<sup>かしこ</sup>畏くも天皇陛下の御親閲を仰ぐことになって、広島県からは県官五名、男子生徒五十名、引率教官六名、女子生徒四十五名、引率教官四名であった。

私は広島県的女子隊長として御親閲を受ける栄に浴することになり、御親閲までの準備として、幾度も集合して色々県からの御指導・御指示・打合せや、親閲式の訓練等々、水も洩らさぬだけの準備をした。御親閲の四日前に広島を発ち、青山青年会館に宿をとった。翌日は上野の音楽学校に全国の者が集まり、御親閲歌の練習、さらに広島隊は宿舎から宮城前までの所要時間の実地検証とともに、往復の態度についての演習などを行い、その翌日、すなわち御親閲の前日に、全体で予行演習を行って明日へ備えたのである。これは厳しい演習であったが、広島県的女子隊は立派であった。

いよいよ当日の朝が明けた。私は他の者より早めに起き、洗面を済ませ、今日という日は私にとっては千載一遇の日で、感激にたえないと、青年会館の三階ベランダから青山の森の東、宮城に向かって、最敬礼をしたのである。いよいよ全員の仕度も整い、女子隊長として隊員に最後の諸注意をして会館を出発した。代々木駅から国電で東京駅まで、東京駅から徒歩で宮城まで、途中は警察官の出動で安全に歩行はできた。全体の集合は御親閲の一時間前であったので、最大限の緊張で待っていたので、その一時間はすいぶん長かった。

いよいよ時間も迫ってきた。やがてこたます宮城の森の中から御出城の合図の音が響いてくる。静かな吹奏楽とともに錦の御旗を前に幾人かの護衛に付き添われた御車がしずしずと二重橋にお差し掛かりになったとき、大隊長から

全員に「ギオツケ」の号令がかかった。私は万感胸に迫り鼓動が激しくなるのを、如何（いかん）ともしがたかった。

いよいよ御車はお立台のそばまで進まれ、陛下が御車からお降りになってお立台に向かわれる前、大隊長から最敬礼の号令がかかった。現人神様（あらひとがみ）として崇め敬い奉（たてまつ）っている天皇陛下の御尊姿に對し、有り難く、もつたいたなく、まともに拝むことができず、地べたに這いかがんでしまいたい感激で、涙にくれた。閱兵式も頭を上げて見ることもできなかった。御親閲歌も、県でもしつかり練習してきた上に、前々日は上野の音楽学校で一斉練習をして臨んだのに、感極まって声がふるえて歌えなかったほどである。とにかく、感激以外の何物もなかった。大東亜戦争が始まる直前のことである。

現人神の天皇が敗戦によって人間天皇になられ、日本国統治の天皇が日本国民の象徴天皇となられた今日も、私はあの日の感激がちつとも変わらないものとして胸の奥深くに刻みつけられていて、思い出すたびに幸福感に浸っている。

広島県知事より教育功勞者として表彰を受ける  
昭和十五年（一九四〇）十一月一日、紀元二千六百年記念式に広島県知事より教育功勞表

彰を受けた。

なお、この記念式の後、広島県教育研究大会が行われのだが、そのとき、「女子教育の要諦」と題した発表をしたとき、知事が非常に感銘されたい。発表の最後が時間切れとなって壇上から降りたら、知事は「時間が切れても、あのような発表なら最後までやらせれば良かったのに惜しかった。」とおっしゃったということを、後から県の係官から聞いたことがある。思うに、私の言うことは理屈や理論ではなく、教育を愛し、教育にすべてを傾倒した教育経験や教育体験を通しての信念から生まれたものであるので、知事もいささか関心を持たれたのであろうと思う。

同年五月十五日、全国教員協会长より教育功勞者として表彰を受けた。広島県からは丸山豊、小山実先生と私の三

人だけであつた。この三人は意見もよく一致し、青年教育に対する意気込みも強く、気魄も持っていた。丸山先生が広島県の青年教育協会長で、私が副会長、小山実先生が理事というメンバーであつた。このメンバーで、研究のためによくあちこちと出向いていたことも、今さらの如く懐かしい想いにふけるのである。

丸山先生は終戦後教壇から降りられ、賀茂郡志和町長として町政に力を注がれている。小山先生も終戦間もなく教壇から降りられ、生まれられた賀茂郡板木村で獣医と教育委員をなさっていたが、半年前に亡くなられた。今生のお別れをしないで永年のお別れをしたことは、口惜しく悲しい限りである。

あれこれと辛かつたこと、嬉しかつたこと、愉快に思つたこと、優越感を感じたこと、劣等感を感じたこと等々、次々と出てくるのであるが、県を代表して全国の研究大会に出て意見やまたは体験発表をしていたころ、方々から私の勤めている学校を参観に来られていた。また、県からの強い要望により、中国地区の公開授業を二回に及び行つたが、ずいぶん遠方からの参観者も多かつた。こうしたときの準備には、幾日も徹夜して勉強や研究をせねばならぬので苦労も多かつた。しかし、そうした機会があるために勉強し、研究も一段と深くでき、私自身が磨かれてきたのだと思つて感謝している。

また戦争中は報国隊として宮城の整備清掃の奉仕にも参加したことがある。なお、地方では生徒とともに報国隊の旗を持つて色々な所に勤労奉仕に出かけていた。また、出征兵士の留守家族を守る意味で、衣類の洗濯・縫製等の奉仕も地域別順に廻っていたが、毎日放課後、または日曜日にも返上してやつていた。生徒は何一つ不足も言わず、思わず、心から奉仕の念を持つてよくやつてくれていた。こうしたことは、生徒たちにとってはかなり大きな負担であり、過重労働であつたと思うが、決して命令されるから仕方なくやるというのでなく、すなわち、盲従でも服従でもなく、自ら買つて出て奉仕するという状態であつた。そういう時代でもあつた。



終戦までは、こうした美德の積み重ねから人間形成がなされていたので、人間関係は誠によくいつていた。それは自己だけを中心に物事を考え判断しそれを実行するというのではなく、自分よりか相手の立場を常に考え、相手を大切に物事を行っていたからである。

現代はまったく反対の考え方や生き方なので、なかなか難しい時代となった。確かに、自己を犠牲にしてまで他に尽くさなくてもよいかも知れないが、他人を全然無視し、自己のみを中心としての考え方や生き方には、私は賛成できないのである。いつの世でも、また如何なる主義主張の時代でも、それではお互いが幸せではないはずだ。私は死ぬまで、あの戦前に養われていた公德心・公共心を養う教育はしたいと思っている。